

男女平等とは何か

佐々木恒平

男女平等とは何か

1

女性の社会参画とか、女性の権利向上とか、ずいぶん昔から言われているが、まだ不十分であるらしい。さらに少子化という問題もあるが、これは明らかに女性の地位向上と関係している。

最近では、女性が社会に出て働くのは当たり前で、夫婦が共働きという家庭も増えているようである。しかし、共働きで子供を育てようと思ったら、家で子供を育てるわけにはいかない。それで、子供は保育所に預けることになる。だが、日本では保育所の数が足りず、保育所を見つけるだけでひと仕事になる。かといって、親のどちらかが家において、子供を育てるといっても難しい。なぜなら、両親共働きでない、収入が足りず、子供を養うことができないからである。そのため、保育所の数を増やすことが、社会的な課題になっている。

しかし、保育所で働いている保育士も、人間である。人間なので、結婚して子供を作る。では、保育所で働いている保育士は、自分の子供をどうやって育てればよいのだろうか。その子供を、別の保育所に預ければよいのだろうか。そうすると、その別の保育所で働いている保育士は、自分の子供をさらに別の保育所に預けなければならなくな

るだろう。そうすると結局、無限の数の保育所が必要になるだろう。しかし、近代国家の強大な力をもってしても、無限個の保育所を開設することはできない。したがって、待機児童の問題は解決不可能であることになる。では、どうすればよいのだろうか。この問題に答えはあるのだろうか。

答えは簡単で、自分の子供は自分で育てればよいのである。そうすれば、待機児童の問題はそもそも生じない。それが可能になるように、社会制度を設計しなおすべきである。女は家で子供を育てていればよい。それが本当の男女平等であろう。

お金を稼ぐことが自分の価値だと考える人間は、お金の奴隷である。社会から評価されることが自分の価値だと考える人間は、社会の奴隷である。いったい自由な人間など、この世界のどこに存在するだろうか。男女が平等に奴隷であるならば、それで十分ではないか。

2

家庭内で行われていた育児サービスが、保育所に外注されるようになる、保育士の給料の分だけGDPは増える。しかし、家事を外注してGDPを増やすことに、どんな意味があるのだろうか。

自分でやっていた仕事を他人に任せるとなると、その分だけ人間が

増え、余計な責任問題も発生する。つまり、仕事を外注することで、社会全体の効率が悪くなると考えられる。しかし同時に、自分でやっていた仕事を他人に任せると、金銭の授受が生じるので、その分だけGDPは増えることになる。

結局、現代においては、GDPを増やせば増やすほど、社会は非効率化され、生きづらいものになってしまう。我々はむしろ、GDPを減らす努力をするべきではないか。それが社会の効率化につながり、結果として、それぞれの個人にとって生きやすい社会が実現できるだろう。GDPは、社会の豊かさの指標ではなく、無駄の多さの指標だと考えるべきではないか。

GDPの水増しということが、大きな社会問題になっているように思われる。このことに、誰も気づいていないのだろうか。

3

たとえば、男ではなく、女が母乳で赤ん坊を育てるならば、粉ミルク代が浮く。もちろん、それ自体は大したことではない。だが、人間が自分でできることを、他のものにやらせることに、どんな意味があるのだろうか。

むやみに自然に逆らうと、その分だけ余計な手間がかかり、無駄が多くなる。無駄が多くなると、生活に余裕がなくなる。それが人間の幸福につながるだろうか。むしろ、自然に従い、自然を上手く利用するほうが、効率のよい生活が送れるのではないか。そのほうが幸せではないだろうか。人間にとって最も身近な自然は、自分の身体である。自分の身体を、もっと活用するべきだと思う。

魂の存在を信じている人には、肉体が自分のものだという感覚が薄いようである。人間そのものは、肉体とは別に存在する幽霊のような

ものである、と考える人にとって、肉体は邪魔なもの、余計なもののように感じられる。

しかし、そのように思考することができるのは、頭があるおかげである。つまり、思考は肉体的な作用である。肉体とは別に精神なるものが存在し、それが思考を行っているという考えは、非科学的である。

頭であれ足であれ、使えるものは使えばよい。それが合理的な思考である。頭を使うのはよいが、足を使うのは嫌だというのは、不合理な思考である。

女は子供を産み、育てるべきである。それが自然である。しかし、それが嫌ならば、無理にやる必要はない。別にそれでも構わないと思う。

4

人は、お金を食べて生きているわけではない。ご飯を食べて生きているのである。服を着て生きているのである。つまり、金がなくても、モノがあれば生きてゆける。金がないくらいで、うるたえる必要はない。

最近の日本人は、金がないだけで大騒ぎする。みっともない限りである。日本はものづくり国家なのだから、ものは十分にある。今はフェイスブックとかグーグルとかが大儲けしているらしいが、あれは虚業である。あんなふうにお金だけ儲けても、大した意味はない。

だいたい数字というのは人を騙すためにあるのだから、数字にこだわってはいけない。売り上げの額面だけに踊らされずに、仕事の中身を追求してゆけばよい。我々の生活を支えているのは、お金ではなく、一人ひとりの人間の仕事である。

最近の世間は、自立自立とやかましい。引きこもりが良くないのは、自立していないからだと言う。しかし、そもそも自立した人間など存在しない。

いまは、自分でお金を稼いで生きている人を、自立していると言うようである。しかし、彼らにしても、自分でお金を作っているわけではない。そんなことをしたら犯罪になってしまう。だから、自分でお金を稼いで生きる人とは、他人からお金をもらって生きる人である。

サラリーマンは会社からお金をもらっているし、その会社は取引先からお金をもらっている。お金をくれる人がいなければ、だれも生活できない。みな、他人に依存して生きているのである。

そもそも、自分が生きていくために必要なものを、すべて自分で作るうとすれば、ものすごく手間がかかる。住む家にしろ、食べるものにしろ、着るものにしろ、それぞれのを別々の人間が作り、それをお互いに融通し合っているから、豊かな生活が送れる。完全に自立した生活とは、ただの貧困である。他人に依存しているから、豊かな生活が送れる。

それが経済ということである。経済とは、経世済民ということであり、人の暮らしを豊かにするということである。それは、簡単に言えば、生活に必要なものを、お互いに融通し合うということである。ゆえに、基本的には、経済とお金は無関係である。

たとえば、政府が紙幣を増刷するというのは、将来入るはずの収入を前借りするようなもので、そういうことを始めると、話がややこしくなる。本来ならば、そういった金融の技術が必要になるのは、戦争の時だけだろう。今は四六時中戦争をしているようなもので、経済そのものが異常である。

正直に言えば、女性の社会進出は、あまり歓迎すべき事態ではない。男と女には、それぞれ別の性質があつて、感情の働き方も違えば、注意の方向や、思考のタイプも違う。

一般的に言つて、女は責任感が薄い。自分さえ良ければそれでいいと思つている。そのため、社会性がなく、秩序ある社会を築くことが難しい。だから、社会的な責任のある仕事を、女に任せるべきではない。

女性は、自分と、自分の身のまわりの人間への気遣いは優れている。しかし、自分と無関係に見える事柄に対する関心は、驚くほど低い。女性の気が届く範囲は、男性よりもずっと狭いのである。それが、女性の社会性を損なつている。秩序ある社会の構築は、男の仕事であつて、女の仕事ではない。

我々は、男女が平等であるべきだ、という願望と、男女は不平等である、という事実とを、混同すべきではない。男女の違いは自然の性質であり、それは、人間にどうこうできるものではない。女には女に向いた仕事があるが、女に向かない仕事もある。そういう仕事を女に任せることは、社会全体の不利益になる。伝統的な社会の中で、男女の役割分担が行われてきたのは、理由がないことではない。

欧米人は混乱と墮落を好むが、日本人は秩序と勤勉を好む。そういう社会の違いが根本にあるので、欧米のような女性の社会進出を、安易に認めるべきではない。あらゆる人間を平等に扱うことは、かえつて差別を助長するだろう。

ここで、以上の議論に根拠はあるのか、と疑問に思う人もいるかもしれない。根拠は、我々の身の回りにいくらでもある。冷静に社会を観察してみれば、私の意見の正しさが理解できるだろう。

男女平等は奴隷階級を必要とする。日常の雑務を代わりにやってくれる奴隷が存在しなければ、男女平等は成り立たない。

アメリカには黒人やヒスパニックがいる。ヨーロッパには移民がいる。それらの人々を奴隷として扱うことなしに、男女平等はありえない。

男女平等は必ず階級社会を生む。それは、本来の平等思想とはかけ離れた、単なるエゴイズムに過ぎない。植民地人は、二十世紀における奴隷階級であった。ヨーロッパ文明は奴隷の文明である。彼らの自由は、常に奴隷制に支えられている。

社会保障と日本の財政

1

社会保障費が日本の財政を圧迫している。このままでは、日本は破産してしまうだろう。

真っ先に削るべきは医療保険であろう。高齢者の医療保障には生産性がない。高齢者の医療費は十割負担にするべきである。

たとえば、線路に飛び込んで、電車にひかれて死のうとする人は、鉄道会社にも迷惑をかけるし、利用客にも迷惑をかける。いろんな人に迷惑をかけて死ぬことになる。今の高齢者の死に方は、それと同じである。死ぬ間に花火のように税金を使って死んでゆく。いくら治療に金をかけても、死ぬものは死ぬのである。それなのに、たった一年二年寿命を延ばすただけに、どれだけの金を使うつもりか。人に迷惑をかける前にさっさと死んだほうがましではないか。

そうして医療費として使われた我々の税金は、全て医者懐に収まることになる。国家の財政を傾けて、医者に貢いでいるようなものである。いったい何のための社会保障か。医者ほどやくざな連中は他にいない。

高齢者が通うべきは、病院ではなくお寺である。念仏を唱えて、あらかじめ死ぬ準備をしておかねばならない。坊さんの話を聞いて、浄土に思いを凝らしていれば、安らかに死ねるだろう。そのほうがお互いに幸せではないか。

医者には、死の苦しみを取り除くことはできない。彼らにできるのは、それを長引かせることだけである。仏の知恵だけが、人間の苦しみを取り除くことができる。

2

さらに、お金が余っている老人は、寺に寄進するべきである。それは立派な行いである。

坊主というものは、仕事をしない。彼らは、人から与えられるものだけで生きている。働かないのではなく、働いてはいけないのである。それが、欲望を持たない生き方を実践するための手段である。

だから、安心してお寺に寄付をするべきである。坊主には欲望がないので、貰ったものを私利私欲のために使うことはない。自分の生活に必要なもの以外は、すべて社会のために使われるだろう。ゆえに、お寺への寄付は、純粋な善行である。

寺とは、一種の金融機関である。それは、贈与のみによって機能する、お金の循環システムである。寺に落とされた金は、すべて公共の利益のために使われる。ゆえに、寺に金を落とせば落とすほど、この

社会は豊かになる。どんな人間であっても、出家さえすれば生きてゆける社会というのは、本当に豊かな社会と言えるのではないか。

逆に言えば、坊主が飢えて死ぬような社会は、情けない社会である。誰もが自分の金を手放そうとせず、他者に対する思いやりが全くない社会では、坊主は飢えて死ぬしかない。社会の一部には金が溢れているのに、坊主が苦しんでいるという状況は、恥である。

坊主には私欲がない。私心がない。そのような人間が見捨てられ、見殺しにされる社会は、本当に貧しい社会である。そんな社会は滅びるに決まっている。

自分が貯め込んだ金を、自分が生き永らえるためだけに使い、死んでゆくというのは、あまりにも情けないことである。それよりも、自分の金を他人のために使い、死んでゆくほうが、はるかに清々しく死ぬだろう。最後くらいは、人の役に立つことをしてもよいのではないか。

3

人の命はフローである。出ていくものもあれば、入ってくるものもある。お金もこれと同じで、入ってくるものもあれば、出ていくものもある。お金が大事だからといって、使わないで溜め込んだままでは、価値がない。それを使うことで、価値が生まれるのである。だから、それをどのように使うか、ということが重要である。

人の命も、大事だからといって、使わなかったら意味がない。それをどのように使うか、ということが肝心である。お金そのものに価値がないように、人の命にも価値はない。それを使うことで、価値が生まれるのである。

危機管理

1

危機管理とは、何をすることだろうか。

危機が起きてから、その対処を考えていては遅い。対処を行うまでの間に、現実の危機はどんどん進展しているからである。したがって、起こりうる危機を予想し、あらかじめ対処法を準備しておくほうがよい。

しかし、それでもまだ遅い。本当に重要なのは、実際に危機が起きたときに、それが危機であると認識するまでのタイム・ラグである。つまり、あらかじめ危機を予想していたとしても、それを危機であると認識できなければ、対処を行うこともできない。そして、危機が生じた瞬間から、それを認識するまでの間に、現実の危機はどんどん進んでしまうのである。

現在の社会における危機管理は、いま、自分は安全な場所にいる、という前提に基づいている。今は安全だけれども、いずれ危機が起きるかもしれないから、そのために準備をしておこう、という発想である。だから、対処が遅れる。今は安全である、という認識が、今は危機である、という認識に変わるまでの時間が、致命的な遅れをもたらすのである。ゆえに、今まで議論されてきたような危機管理の方法は、全く不十分である。

たとえばアメリカ人は、十分な危機管理を行ってきただろうか。もしも、アメリカ人の危機管理法が有効であったならば、九・一一は起きなかったであろうし、真珠湾攻撃も防げたであろう。これらの事件が起きたときに、当事者たちや政府当局が演じた失態は、アメリカ的な危機管理がいかに無力であるかを物語っている。彼らの対応が常に

後手に回るのは、先ほど述べたような認識の遅れが原因となっているのである。

自分はいま安全な場所にいる、と思うから、現実には先手を取られる。したがって、自分はいま危機の中にいる、と考えることで、現実の先手を取ることができる。この世界に安全な場所などどこにもないし、人生の中で安心してよい時など一瞬たりともない。そのような意識を持つことで、はじめて、リアルタイムに危機に対処することができるようになる。

危機は、いまこの時に起きている。それが本当の危機管理である。

2

日本人はもともと平和を愛する民族だが、売られた喧嘩は必ず買う。そして、相手がそのつもりならば、こちらから先制攻撃を仕掛ける。いかなる勝負でも、先に手を出した方が有利である。だから、機先を制するということが重要である。相手が手を出す寸前に、こちらから手を出す。

その意味では、アメリカほど与しややすい相手はない。アメリカのやり方は、必敗である。百戦戦えば百回負けるだろう。イスラム教徒が相手ならば、彼らも互角に戦えるかもしれない。しかし、我々の敵ではない。

京ア二放火事件

1

これは、二・二六や五・一五に匹敵するような、思想的なテロリズムである。日本社会を象徴するものに対する、容赦ない攻撃である。一体何が起きているのか。どうして誰も気付かないのか。これは非常事態ではないか。

昭和の日本人は、自分たちが直面している危機を、正しく危機として認識していた。その対処がすべて適切ではなかったとしても、危機を認識することはできていた。しかし今の日本人は、自分の体が燃えていても気付かない。それを他人事のように、ニタニタ笑いながら眺めているだけである。

アニメがなくなったら、今の日本に何が残るのだろうか。アニメは日本の良心とも言えるものなのに、それが燃やされても何も感じないのだろうか。

京都アニメーションは、日本のアニメ業界の中心だった。そこに攻撃が加えられたということの意味が、本当に分からないのだろうか。これは、日本社会そのものへの攻撃であり、矛盾の告発である。

2

日本のアニメーションは、普遍的な価値を持つ、非常に優れた文化である。しかしながら、日本社会の内部において、それが正当に評価されてきたとは言い難い。これは異常なことである。

日本人のアニメーションに対する一般的な態度は、軽蔑、あるいは無関心であろう。それは、大人の文化ではなく、子供の娯楽に過ぎない。

いと考えられてきた。なぜだろうか。

それはおそらく、アニメーションというものが、優れて日本的な表現だからであろう。つまり、アニメーションという表現形態そのものに、西洋的な文化からの逸脱が認められるのである。

西洋人は、アニメーションの正しい扱い方を知らない。彼らの芸術の伝統は、この世界を静的なものとして捉えるからである。西洋の彫像や絵画は、輪郭がはっきりしていて、明晰さが際立つ。しかし、これらの芸術が表現するものは、現実を理想化した姿であって、一種の幻想に過ぎない。現実を静止した姿において捉える、しかもそれを、現実以上に細かい部分まで描く、ということが、西洋芸術の特徴である。

それに対して、アニメーションという芸術には、即興的な要素がある。物事を明晰さによって捉えるというよりは、その流動性によって捉えようとする。アニメーションにおいて大切なのは、一枚の絵画ではなく、複数の絵画の間にある繋がりである。その繋がりこそがアニメーションの本質であって、それを強調するために、一枚一枚の絵画の明晰さは犠牲にされざるを得ない。

もちろん、だからといって、アニメーションに芸術的な価値がない、ということにはならない。むしろ、絵画や彫刻とは全く異なる芸術が、そこには提示されているのである。それは、西洋の芸術よりも、東洋の芸術が追求してきたものに近い。それはこの世界を、静止したものとしてではなく、躍動するものとして捉えようとする試みである。

松尾芭蕉の「軽み」というのは、まさにそのことを言っているのではないか。墨跡の流れるような線の中に、我々は精神を見るのではないか。変化の中に美しさを見ること。それが日本の文化だったはずで

ある。

だからこそ、日本人はそれを子供っぽいと感じてしまう。日本人のアニメーションに対する態度を決定付けているのは、西洋的なものに対する劣等感であり、自国の文化に対する自信のなさである。それは、日本的なものを切り捨てるのが成熟であると考えるような、歪んだ心性の現れである。その傾向は、あの戦争のトラウマによって、より強調されてしまったように思える。

正直に言えば、私の目には、ミケランジェロの彫刻は、良くできたおもちゃにしか見えない。むしろ、元代の山水画や、蘇東坡の書のほうが、この世界の真理を表現しているように思われる。もちろん、アニメーションという芸術は、まだそこまで成熟しているとは言えない。しかしそれは、優れた芸術を生み出す肥沃な土壌になりうるだろう。

3

戦後の日本人には、ある種の負い目があるように見える。昭和の日本を支え、戦った人々を裏切り、日本を、そして天皇を、アメリカの手に渡してしまった、という負い目である。そして、自分たちをそのような状況に追い込んだ、父たちへの恨みである。それは一言でいえば、父たちに見捨てられた、という思いであろう。

その負い目を忘れるために、日本的なものを徹底的に否定し、西洋的なものに同化しようとしてきた。そうすることで、過去を克服できると思い込んでいるのである。

しかしそれは、日本に対する裏切りに他ならない。なぜならば、我々は勝ったからである。この日本が、アメリカなどという野蛮人の集まりに、負けるはずがないではないか。

あれを終戦と呼ぶことは、欺瞞でも何でもない。終戦だから終戦と呼ぶのである。それは敗戦ではない。我々自身が、戦争の終結を選んだのである。我々は天皇を守った。我々は日本を守った。我々は、成り功したのである。

資本主義とAI

1

AIが進歩すると、生活が豊かになるとか、仕事が奪われて、逆に人間は不幸になるとか、色々なことが言われている。

AIが進歩すると、たとえば新製品の設計とか、新しいソフトウェアの開発とかも、できるようになるかもしれない。そうすると、人間は研究開発をしなくてもよくなるが、代わりに開発者やプログラマーの仕事はなくなる。では、それらの人々には、全く仕事なくなるのだろうか。

おそらく、そうではない。たとえば、製品の開発をAIが行うようになったとしても、完成品のテストを行う人間が必要になるだろう。AIが作った製品を、AIが使うのであれば、AIがテストを行えばよい。しかし、人間が使う製品のテストは、どうしても人間が行わなければならない。

そうすると、AIがソフトウェアの開発を行うようになった世界では、人間の仕事は、出来上がったソフトウェアのテストとデバッグしなくなるだろう。その仕事だけは、AIにはできないからである。しかし、一体誰がそんな世界を望むのだろうか。

プログラマーはコードを書いているときに一番楽しい。人間は、自分の仕事に夢中になっているときに、一番楽しいのである。その楽しみを奪うことによって、どうやって豊かな社会を実現できるのだろうか。

資本主義を擁護する人々は、一人ひとりの人間が自分の利益を追求することによって、社会全体の利益が増加する、ということを強調してきた。たとえば、ある会社が利益を上げようとすれば、他の会社よりも多くの製品を売らなければならない。そのために、消費者に気に入られるような、品質の良い製品を作る努力をするようになる。それによって人々の生活の質が向上し、社会全体が豊かになる。これが資本主義の理念である。

しかしAIの場合は、これは当てはまらない。性能の良いAIを開発することで、その開発者は利益を上げるだろう。しかしながら、それが社会全体の利益になるとは限らないのである。性能の良いAIは、人々から仕事を奪い、人生の豊かさを奪ってしまうかもしれない。ここでは、個人の利益の追求は、社会の利益と一致していないように思われる。

資本主義を支えている理念は、非常に脆弱なものである。奇跡的によい条件が重なった時のみ、資本主義は社会の福祉と合致する。しかし、その条件は普遍的なものではありえない。むしろ一般的には、資本主義の理念は社会の利益に反する、とさえ言えるだろう。なぜならば、個人の利益の追求が常に社会の利益と一致する、という思い込みは、明らかに社会にとって有害だからである。

ある行為が、自分一人の利益にはなるけれども、自分以外の人間の利益を著しく損なう可能性がある、という場合には、その行為を行うべきではない。あるAIを開発することで、自分一人は儲かるけれども、自分以外の人々が不幸になるのであれば、そのようなAIは開発するべきではない。

個人の利益の追求は、公共の福祉に反しない範囲でのみ認められる

べきである。もしも、資本主義がこの原則に抵触するのであれば、それは否定されねばならない。

これは倫理の問題である。このような問題に直面した時に、どのような判断を行うか、ということが、その人間の価値を決める。ゆえに、この種の価値判断を、法律や、それ以外の手段で人に強制することはできない。人間は、自分がどのような人間であるべきかを、自発的に決定しなければならない。

ここで私は、社会という言葉をも、自分と自分以外の人間の集合、という意味で使っている。それ以上でも以下でもない。その集合の範囲をどこまで広げるかによって、社会の大きさは変化するだろう。しかし現代においては、地球上のすべての人間が、一つの社会を構成していると考えるべきである。

3

税金は、金のあるところから取るしかない。ないとところから取るうとしても、上手く行くはずがない。安定的に税収を確保するためには、金持ちから金を取る必要がある。そのためにも、世界政府が必要である。世界全体を一つの政府が管理するようになれば、税金逃れは難しくなる。

もちろん、あまり締め付けを厳しくすると、自由な経済活動が阻害され、新しい発明が生まれなくなるかもしれない。また、共産主義のように、資本家の命まで奪おうとするのは逆効果である。死んでしまつたら、税金を取れなくなってしまう。だから、金持ちは生かさず殺さず、適度に搾取するべきである。

戦場ジャーナリスト

1

戦場ジャーナリストが外国の武装勢力に捕まって、日本政府が身代金を要求される、という事件がときどき起きる。

そういうとき、日本の世論には、捕まったジャーナリストを非難するような傾向がある。それは自己責任だ、という声もよく聞かれる。いったい日本人は、そのジャーナリストに対して何を求めているのだろうか。そのような状況で、責任を取るとはどういうことだろうか。それはもちろん、自決である。生きて虜囚の辱めを受けるくらいなら、潔く自決しろと言っているのである。日本人の間には、いまだに戦陣訓の倫理が生きている。

日本のジャーナリストが戦場へ取材に行くときには、せめて手榴弾くらいは持って行くべきであろう。そして、武装勢力に捕まりそうになったら、自爆しなければならぬ。そうすれば、国民から非難される心配もなくなるだろう。

戦場は遊び場ではない。その程度の覚悟もなしに戦場へ行くのは、心得違いである。というのが、日本の世論である。これはこれで健全だと思う。

2

そもそも日本人は、ジャーナリズムに対してあまり寛容ではない。ジャーナリズムを真面目な仕事だと見なしていない節がある。

社会派のジャーナリストの中には、政府の嘘を暴くことが自分の仕事だ、と心得ている者がいる。しかし、政府が嘘をつくのであれば、

嘘をつかない政府を作ればよいのである。そうすれば、別にジャーナリズムは必要ない。

ジャーナリズムという仕事は、すべての人間には嘘をつく権利がある、という前提の下に成り立っている。よって、政府にも嘘をつく権利があり、そのこと自体を咎めることはできない。だから、我々がその嘘を暴かねばならない、という理屈になる。

そして、そのような前提の下で生きているので、ジャーナリスト自身が平気で嘘をつく。心にも思っていないことを平気で言う。ジャーナリズムそのものが、公序良俗を乱しているのである。公共の敵である。だから、ジャーナリストの言うことは真に受けず、半分娯楽として享受するくらいが丁度よいのだろう。

上知と下愚は移らず

最近、自分の考えを変えない人が尊敬されるようである。一度自分が正しいと判断したものは、いつまでも信じ続ける、という人は、周囲の人から見れば、確かに頼もしいかもしれない。一度その人に信頼されれば、それが変わることはないからである。

しかし、社会全体の観点から見れば、それが害を生むこともある。たとえば政治家の場合、そのような態度は、賄賂や職権の濫用と容易に結びつくだろう。

人間は、間違った判断を下すこともある。あるときに正しいと思われたことが、実際に正しいとは限らないし、あるときには正しい判断であったものが、状況が変わっても、正しい判断であり続けるとは限らない。自分が下した判断が誤りであると分かった場合には、それを

正さねばならない。すでに間違いだとか分かっていてる考えに、いつまでもこだわり続けるということは、愚か者のすることである。

それが正しいものであれ、間違つたものであれ、自分が下した判断をあくまで尊重し続ける人間のことを、下愚と言う。上知とは、実際に正しい考えを抱き、そのことを自覚している人間のことである。下愚の考えが移らないのは、何が正しいかを気にしないからである。上知の考えが移らないのは、すでに正しい考えを手に入れているからである。

論語においては、この言葉の前に陽貨の話が出てくる。そのため、これが、ある種の政治家へのあてつけであることが分かる。現代で言えば、下愚の政治家とはポピュリストである。

自説を曲げない政治家は、いつの時代でも一定の支持を得るものである。しかし、真に上知の政治家は、いつの時代も稀である。

日本の政局

1

どうでもいいことかもしれないが、共産主義は、日本の力に抵抗するために生まれたものだと思う。ロシアでは日露戦争の圧力によって、中国でも日本軍に対抗するために、共産主義が成長した。ある意味で、共産主義は日本軍の子供である。そのため、彼らは戦略的な思考に長けている。

大東亜戦争中の日本軍の行動が理解しがたいのは、将校たちが不合理だったからだ、といった議論をよく見かける。しかしそれは、歴史を研究する学者の知性が、日本軍の参謀の知性に追い付いていないだ

けだと思う。そのため、いまの研究者には日本軍を理解することができず、日本軍そのものが不合理な組織だったのだ、という結論に至る。それは、研究者自身の無知を、研究対象に転嫁しているに過ぎない。日本軍の戦略性は、レーニンや毛沢東に受け継がれ、共産党の中で生き続けているのかもしれない、と私は思う。日本軍の登場は、世界史上において革命的な意義を持っているのだが、当の日本人自身が、それを理解していない。悲しむべきことである。

2

千島列島の全島返還を主張しているのは、日本の政党の中では共産党だけである。その主張は戦略的に正しい。北方四島だけが日本の領土で、残りの千島はロシアの領土だとする日本政府の主張は、筋が通らない。千島はもともと日本の領土だったのだから、千島全島の領有を主張しなければならない。

連合国の戦後処理の方針は、日本が戦争によって獲得した領土はすべて放棄させるが、それ以外の領土はそのまま承認する、というものだったはずだ。千島は日露戦争以前から日本の領土であり、戦争によって獲得したものではないのだから、サンフランシスコで千島の放棄を迫られたことが、そもそもおかしいのである。だから、千島の全島返還が筋であつて、北方四島だけの返還という主張は、意味不明である。

共産党はその辺のことが分かっているので、正確な判断ができていく。自民党はただ「領土問題の解決」と言うだけで、どのように解決するつもりなのか全く分からない。平和な時代であれば、そのような機会主義でも上手く行くかもしれない。だが、いざ事態が流動化した時には、明確な戦略を持った政党がイニシアチブを握るのは当然であ

る。そうなったら、日本が共産党にのつとられる可能性も皆無とは言えない。

もちろん、今の共産党には戦略的な目標が欠けているので、彼らが政権を取ったとしても、共産主義革命を実行することはできないだろう。なまじ戦略眼があるだけに、彼らには、共産革命が上手く行かないことがはっきり分かっている。そこで、新しい目標を設定できるかどうか、共産党の行く末を左右するだろう。

3

憲法改正に関しては、九条が焦点になるはずである。個人的には、九条二項を削除すればよいのではないかと思う。九条一項では、紛争解決のための戦争を放棄しているが、これはそのまま構わない。平和のための武力行使の可能性が残されているからである。しかし二項では、すべての武力を放棄する、と言っているのです、これはまずい。世界最終戦争は平和のための戦争である。ゆえに、九条一項には抵触しない。しかし、アメリカと核ミサイルの打ち合いをするためには、二項における武力の放棄が障害となる。だから、これは削除したほうがいい。

自衛隊に関しては、あってもなくても構わないだろう。そもそも、中国もロシアもアメリカも、今では北朝鮮でさえ核ミサイルを持っているのだから、通常兵力がいくらあったところで、抑止力にすらならない。自衛隊はただの飾りである。だから、維持費だけでも無駄遣いに等しいので、自衛隊はやめるべきだ、という共産党の意見は、ここでもやはり正しい。

軍隊は国家の象徴であり、また、治安維持のために必要な面もあるため、私は、自衛隊はあったほうがいいと思う。しかし、憲法に明記

する必要があるとは思えない。したがって、私の意見としては、二項の削除だけでよいと思う。

4

もしも、憲法に軍隊の存在を明記する場合、誰を指揮官とするべきか、ということを考えねばならない。

私は、政治家に軍隊の指揮権を委ねることには反対である。何を考えているか分からない人間に陸海軍の指揮権を預けるくらいなら、軍隊などないほうがよい。この意味では、私は、自衛隊の即時廃止もありえると思う。指揮官とは、軍隊にとって絶対的な存在であり、彼の判断が兵士の命を左右する。選挙で選ばれたというだけでは、指揮官としてふさわしいとは言えない。

では、誰が指揮官であるべきなのか。そもそも我々は、何のために軍隊を必要とするのか。どんな戦争をするつもりなのか。いまこの世界で、軍隊が必要とされるのが本当にあるのだろうか。

もしも、我々が戦争をするつもりなのであれば、どの国と、どんな戦争をするべきなのかを考えなければならぬ。そして、戦争をするならば、必ず勝たねばならない。軍の指揮官は、その全てに対して責任を負わねばならない。兵隊は死んだが、何の成果もなかった、では済まない。そのような責任を、一人の政治家に、本当に負わせるべきなのか。また、その任に堪えるのか。

軍隊の指揮官に必要な資質がどのようなものであるか、我々は本当に知っているのか。それは本当に、政治家として国民に選ばれるために必要な資質と、同一のものだと言えるのか。

軍の指揮官は、戦争に勝つために必要なことを知っていなければならぬ。また、どうすれば兵の命に対して責任をとることができるのか。

かを、知っていなければならない。我々は本当に、そのような基準で政治家を選んでいるのだろうか。また、それを知っている政治家が、本当に存在するのだろうか。

私を知る限り、そのような条件を満たしうる人物は、この国にはお一方しかいらっしやらない。

参謀の仕事

1

石原莞爾が参謀本部の作戦部長だった時に、盧溝橋事件が起きた。石原は不拡大方針を貫いたが、その方針は、部下の参謀や現地地の将校たちに裏切られ続けた。結果として、日中戦争の戦線は際限なく拡大してゆくことになる。だが、当時の彼の判断に疑問符をつける研究者も多い。

問題とされるのは、昭和十二年七月十日に参謀本部で決定された、北支時局処理要綱である。ここで、日本内地や満洲から数個師団を北支に派遣して、冀察政権軍に対峙させるという方針が決定された。この増派が、現地でまとまりかけていた協定案を台無しにし、また、好戦的な国民世論を後押しして、日中戦争の拡大を決定づけてしまった。石原はこの決定を支持したのである。

石原は、自身不拡大を主張しながら、どうして増派に賛成したのか。彼が反対していたならば、盧溝橋事件は、ただの局地的な戦闘で終わっていたのではないか。そのように想像する人も多い。

そのとき彼が気にしていたのは、国民党軍が北上している、という情報であった。ただでさえ劣勢な支那駐屯軍に対して、国民軍主力の

圧力が加われば、簡単に押しつぶされてしまうだろう。そのような事態を恐れて、あらかじめ追加の部隊を派遣し、現地軍を増強しておくことにしたのである。

このような石原の判断はどこから来たのか。それは、兵士の命に対する責任感である。兵隊を無駄死にさせることだけは絶対に回避しなければならない、という使命感である。増派によって、その可能性を少しでも減らすことができるのであれば、彼に反対する理由はなかった。

それは本来、参謀が持つべきものではない。司令官が持つべき責任感である。しかし、恐ろしいことに、当時の日本軍には司令官がいなかったのである。

2

参謀には、あくまでも補佐としての役割しかない。それは、司令官の判断を容易にするための、補助的な機関である。参謀が様々な作戦を立案し、司令官が軍隊の行動を最終的に決定する。それが正常な軍隊の姿である。この場合、兵の命に対して責任を負うのは、最後に決定を下す司令官であって、参謀には直接的な責任はない。だからこそ、自由な作戦立案が可能になる。

当時の日本軍では、参謀本部が実質的な司令部になっていた。しかし、参謀はあくまでも参謀であり、将兵の命に責任を負う能力はない。その中で石原は、できる限り兵の命に責任を持つとした。彼は、参謀としてではなく、將軍として振る舞ったのである。

しかし昭和の陸軍は、そのような人物を受け入れることができなかった。ある意味で、石原は乃木大将になろうとしたのである。軍隊における責任を、自分一人で引き受けようとした。だが結局、日本軍

は將軍の存在を受け入れられなかった。その後も司令官不在のまま、無責任な参謀の暴走が続けられてしまう。

3

本当は、いたのである。本当は、日本軍にも司令官はいた。しかしその人は、立憲君主を建前として、決して兵の前に姿を見せなかった。もしも彼が、本当に日中戦争を防ごうとしたのであれば、將兵の前に姿を見せて、朕が司令官であるぞ、と一言言えばよかった。そうすれば、統帥権の問題は一瞬で解決したはずである。

司令官とは、軍隊の象徴である。全ての命令は司令官から流れ出してくるのだ、という印象を兵隊に持たせることが、司令官の仕事である。それによつて軍隊の指揮系統は保たれる。その象徴としての役割を、彼は果たすことができなかった。昭和という時代にふさわしい君主ではなかった。暗君であった。終戦のご聖断はたしかに素晴らしかったが、それは遅すぎたのである。盧溝橋の時に決断を下さねばならなかった。

そもそも、当時の日本には構造的な問題があったのであり、それを天皇のせいにするべきではない、という意見もあるだろう。しかしそれを含めて、すべての責任を一人で負うのが君主という仕事である。したがって、あの戦争は昭和帝の責任であった、と我々は言わねばならない。

それは、対英米開戦の責任ではない。日中戦争を止められなかったことと、その結果としての將兵の犠牲拡大への責任である。対英米戦争は時局の然らしむるところであり、昭和帝の責任とは言えない。また、何度も繰り返すようだが、終戦の決断はご立派であった。おそらくこの時から、昭和天皇は君主としての歩みを始められたのだろう。

昭和という時代は、様々な不幸に直面しながら、それでもなお、その輝きを失うことはなかった。平成は、昭和を受け継ぎ、それを完成させたと言えることができる。次の令和は、いかなる時代になるだろうか。

神の血脈

1

現在の天皇陛下は第百二十六代である。最初の天皇が神だったとすれば、それは百二十五代前のことになる。ゆえに、もしも、全ての天皇が人間と結婚して子をなしたのだとすれば、現在の天皇陛下は、ほぼ完全に人間である。

たとえば、父親がロシア人ならば、その人には2分の1だけ、ロシア人の血が流れていることになる。祖父がロシア人ならば4分の1、曾祖父がロシア人ならば8分の1、高祖父がロシア人ならば16分の1だけ、ロシア人の血が流れていると言える。それと同じように、125代前のご先祖が神様ならば、その人には、2の125乗分の1だけ、神様の血が流れていることになる。これは、実質的にはゼロである。

つまり、たとえ初めの天皇が神だったとしても、現在の天皇陛下は百パーセント人間である。神様の血は一滴も流れていない。ゆえに、最初の天皇が神であったかどうかというのは、些細な問題である。

2

だから個人的には、天皇の血筋にこだわる必要はないように思う。たとえば、養子が天皇になっても構わないはずである。もちろん伝統

は伝統なので、それを無視するわけにはいかないが。

国家元首の後継者を決める一番合理的なやり方は、ドライ・ラマの転生制度ではないかと思う。国民の中から無作為に次の指導者を選ぶのだから、これほど公平なやり方はない。

君主が世襲である場合、世継ぎが確保されれば、国民は安心する。今の君主に世継ぎが生まれにくいことほど、心細いことはない。しかし、多くの世継ぎを確保しようとすれば、それだけ費用がかさむ。江戸時代には、將軍の側室が何百人といて、それが幕府の財政を圧迫していた。世継ぎを確保したいならば、皇室を大きくすればよい。しかし、大きくなればなるほど維持が難しくなるし、そもそも現代社会の通念に反する。

昔は華族というのがあって、それが、皇室に人材を供給するプールのような役割を果たしていた。一国民が皇室に入るとするのは、心理的に大きな負担である。しかし華族ならば、もともと皇室に近い環境で育っているのだから、心理的な負担はそこまで大きくない。華族というものが、天皇と国民の間にはさまって、緩衝材になっていたわけである。それも今はないので、天皇家と国民の間には、巨大な溝ができてしまった。こうなると、皇室が先細りになるのは当然である。

結局、ある夫婦に子供が生まれるかどうか、それが男の子かどうかというのは、確率の問題なので、成り行きに任せるしかないのだろう。

3

国民と皇室の距離を縮めるために何をすればよいかと言えば、まず溝を埋めるべきだろう。

もともと天皇が京都にいらしたときには、御所の周りにあんなに大きな堀などなかった。天皇は庶民と同じ高さで、同じ空間で生

活していたのである。それが明治になって江戸城に移ってくると、天皇家の性格が変わってしまった。城とは戦争のための城塞であり、外敵の侵入を拒む目的で作られたものである。そういう場所に天皇陛下が立てこもられてしまったので、おのずと国民との間に心理的な距離ができてしまった。

その距離を縮めるためには、城塞としての江戸城の機能をすべてなくしてしまえばよい。つまり、皇居の周りのお堀を埋め立てて、周りの空間と一体にしてしまえばよいのではないか。つねに国民の中で、国民と共にある、というのが本来の天皇家だったはずであり、その姿に戻ってもよいと思う。もちろん、京都の御所に戻りになっていくという選択肢もあるかもしれないが、現代日本の中心はやはり東京なので、陛下には東京に居ていただかないと困る。

我々は、明治政府によって作られた近代的な天皇家の性格を、少しづつ崩してゆくべきではないだろうか。そのために何が必要で、天皇家がどうあるべきなのか、様々な議論が必要である。

4

私ごときがこのようなことを述べるのはおこがましいことではあるのだが、無礼を承知で敢えて述べさせてもらう。

天皇たる人に必要な資質は赤心である。まごころである。自分のことだけでなく、他人のことを思いやる心である。自国の民だけでなく、他国の民をも思いやる心である。それ以外に必要なものはない。

多民族国家

1

日本人はかつて、満洲国という多民族国家を作った。終わり方は唐突であったが、それ以前に、その運営の仕方の問題があったように思う。一方で、現在の日本はまさに、満洲国のような多民族国家になりつつある。そこで、今後の日本を考える上で、過去の失敗から学ぶということは非常に重要である。

現在の角界におけるモンゴル人力士の扱いを見る限り、日本人は、満洲国のところから全く変わっていないようである。満洲国のときも、モンゴル人はよく働き、国家のために尽くしてくれた。しかし、彼らはそこで二級市民のような扱いしか受けなかった。その不満が、終戦間際になって、モンゴル人士官の反乱という形で噴出することになる。この件に関して言えば、モンゴル人に落ち度はない。日本人の横暴が招いた結果であり、自業自得である。

我々は彼らを、自分たちに都合のいいように使い、彼らの意志を汲むことをしなかったのではないか。彼らは何のためにこの国に来て、働いているのか。満洲国のモンゴル人は、民族の独立のために働いた。では、いま日本で働いている人々は、何のためにそうしているのか。我々は、彼らを利用することばかり考えてはいないか。そういったことを改めて反省してみるべきである。

2

移民問題は一国だけの問題ではない。

今はまだ、日本とASEAN諸国との間には経済的な格差がある。それが、日本への移民の流入を促していると考えられる。しかし、その差は急速に縮まりつつある。つまり、現在における移民問題と、近い将来における移民問題は、全く別の形をとることが予想されるのである。私自身は、地域間の経済格差が小さくなり、ある程度の平衡状態に達することが望ましいと考える。

移民問題とは、日本を含む地域社会全体がどのように発展するべきか、という国際的な政治問題である。このような問題について考える場合、我々は、アジアという地域の将来の姿を思い描かねばならない。

実際問題としては、言語の壁はやはり大きく、人の移動は、モノの移動と同じようにはいかないだろう。ゆえに、地域共同体を作るとしても、各々の国家あるいは地域において、政治的な独立は保証されるべきである。一方で、経済的な一体化は、すでにかなりの程度達成されている。この点で協力態勢が築けることに疑いはない。一番の問題は国防であろう。国防の共同化が可能かどうか、それがどの程度まで達成されるか、ということが本当の問題だと思う。

移民の問題は、地域統合という問題の一つの側面にすぎない。移民の量が、国民の規模に対して無視できない大きさになりつつあるということは、とりもなおさず、地域統合の可能性が高まっているということである。そのとき真に問題となるのは、軍事力のあり方であろう。国防の共同化は、地域外の脅威に対応するためというよりも、むしろ、地域内の安定のために必要とされる。したがって、この枠組みへは、中国と日本は必ず参加しなければならない。さらに、ロシアとインドの参加が望ましい。

昔のアジアであれば、たとえばモンゴル帝国の場合のように、武力の行使によって統一が実現されたはずである。しかし現代において

は、兵器の破壊力はあまりにも強くなりすぎている。ゆえに、武力による地域統合の可能性はありえない。むしろ、軍事力の増強を抑止する何らかの枠組みを作ること、統合が可能になるのではないだろうか。国防の共同化は、過度の軍拡競争を抑止する最もよい手段になりうると思う。

地域外への対処としては、核ミサイルがいくらあれば十分だろう。しかし、地域内の問題を解決するために核を使うわけにはいかない。具体的に何をどうすべきかは、まだ分からない。

また、これらの問題と共に、地域社会に通底する倫理的な基盤、つまり道徳を作るといふ課題もある。それは法律というほど堅苦しいものではなく、精神的な連帯感を呼び起こすようなものがよい。文学と書いてもいいかもしれない。地域の統合のためには、人々の連帯感を表現できるような、何らかの象徴が必要になるだろう。

ここまでくると、まるで実現不可能な絵空事のように感じられるかもしれないが、実際には、地域統合の必要性はかなりひっ迫しているように思われる。近い将来に、何らかの解決が求められるはずである。それが破局的なものとならないように、今のうちから道筋をつけておくべきであろう。

私は、この統合体の名称として「東亜連盟」を提案する。また、この問題に対する活発な議論を望む。

合衆国憲法と人種差別

1

合衆国憲法は、黒人奴隷のことを、労働に従う義務のある者、と表現している（第四条第二節の逃亡奴隷の条文）。建国の父たちは、祖国に奴隷制度があるという事実を隠そうとして、わざと婉曲的な表現を用いたのである。この欺瞞に満ちた表現こそが、現在まで続く人種差別の原因である。

奴隷制度そのものが問題だったのではない。それを隠そうとしたことが問題だったのである。もともと存在しない制度を廃止することはできない。奴隷制度は、憲法上で存在を認められていなかったため、それを完全に否定することもできなかった。そのためアメリカには、いまま精神の上で奴隷制が生き残っているのである。

合衆国憲法そのものが、欺瞞の上に成り立っている。だから、それをいくら修正してみたところで、嘘を嘘で塗り固めることにしかならない。人種差別の問題を解決するためには、合衆国憲法そのものを否定するしかないだろう。

また、インディアンをあらかじめ合衆国から排除していることも、大きな問題である。インディアン・ネーションという言葉には、あらゆる欺瞞が凝縮されている。どうしてこのような憲法の下で生活することに耐えられるのか、私には理解できない。

どれほど美しい言葉で飾っても、嘘は嘘である。アメリカ人はいつになったら、このことに気づくのだろうか。

2

アメリカの政治家は何かというと、大統領の命令を絶対的な権威として持ち出す。彼らはまるで、これは大統領の決めたことだから、我々は従わざるを得ないのだ、あるいは、我々は大統領の決定に口を出してはならないのだ、と考えているようである。

しかし、そのような態度は、民主国家の自由な国民にはふさわしくない。むしろ、独裁国家の官僚にふさわしいものである。

大統領の判断が間違っているならば、国民がそれを正さねばならない。大統領が間違った判断しか下せないのであれば、国民が彼を辞めさせなければならぬ。それが民主主義である。大統領の決めたことだからといって、何でもかんでも唯々諾々と従うのは、全く民主的ではない。それは独裁的である。

アメリカ人は、口では盛んに民主主義を唱えていながら、彼ら自身は全くそれを実践できていない。だから彼らは、世界中からばかにされ、もの笑いにされているのである。アメリカ政府の言葉や行動は、世界から全く信用されていない。

そして、アメリカ人がばかにされる度に、彼らと同盟関係を結んでいる我々日本人も恥をかかされることになる。これ以上、同盟国に恥をかかせないで欲しいものである。

キリスト教

1

キリスト教は実在しない。キリスト教という宗教が存在する、という考えそのものが迷信である。

あえて定義しようとするれば、キリスト教徒とは、不合理な考えを信じる人々である、とも言おうしかない。というのも、キリスト教徒とは、何らかの決まった考えや信仰を持つ人々の集まりではないからである。

たとえば、キリスト教徒とは、イエスが神であることを信じる人のことだろうか。そう考えてみると、すぐに例外が見つかる。ユニタリアンはイエスの神性を否定するが、キリスト教の一種だと考えられている。

では、聖書の記述を信じる人がキリスト教徒だろうか、と考えると、キリスト教の信仰は進化論や地質学と両立する、と考える人々に出くわす。しかし聖書の記述から考える限り、天地の創造は数千年前までしか遡れない。つまり、地質学的な地球の年齢は、聖書の記述と明らかに矛盾しているのである。それらが両立すると考える者がキリスト教徒でありうるということとは、聖書の記述を信じるかどうかというところ、キリスト教の信仰とは無関係であるということになる。

結局のところ、キリスト教徒とは、自分が信じたものを信じる人々の集まりでしかない。あるいは、自分が信じるものが正しい、と信じる人々の集まりと言ってもいい。その考えが本当に正しいかどうか、ということとは、彼らにとってはどうでもよいことである。ただ、自分はそれを信じている、という事実が、彼らにとっては何よりも尊いものと感じられるのである。

キリスト教徒の信仰を支えているのは、何が真実であるかを決定することはできない、という信念である。何が正しいか、ということは人間には知りえないことなのだから、何を信じててもよい、つまり、私が何を信じようと私の勝手だ、という態度が、キリスト教の根幹にある。だから彼らは、人間の意志とは関係なく、客観的に真実が決定さ

れうる、という考え方を、あくまでも排除しようとする。

キリスト教の本質とは、真実の否定である。信仰の否定である。真実が存在する、という考えを否定するところにしか、キリスト教の信仰は成り立たない。この点で、キリスト教と無神論は一致する。無神論はキリスト教の一種である。それは、信仰を持たないという形の信仰である。信仰そのものが極限まで退化した姿である。つまり、キリスト教徒とは、何も信じていない人間のことである。

真実は存在する。それを知る手段も存在する。そう信じるのが本当の信仰である。

2

そもそも、何がキリスト教であるのか、という定義がはっきりしていれば、異端と正統をめぐる議論は生じないだろう。キリスト教とは何か、ということをはっきりとは決められないから、何を異端とするか、ということも半ば恣意的に決定されることになる。このことから、キリスト教には実体がないことが分かる。

仏教においても、これと同様の事態がしばしば見られる。しかしながら、仏教の歴史では、教義の違いが深刻な宗派の対立に至ることは少ないし、それが信者同士の凄惨な殺し合いに発展することは、ほとんどなかった。歴史上最も深刻な宗派の分裂は、小乗と大乘の分裂であったろうと思う。しかし、この時ですら、異端と正統の違いが明確に意識されることはなかった。

それはなぜかと言えば、仏教とは、仏の教えに従うことを意味していたからである。仏とは仏であり、仏以外に仏はいない。仏が仏であることに異議を挟むものは、一人もいなかった。仏の言葉に価値があるのは、それが仏の言葉であるからであり、それ以外の理由はない。

しかし、キリスト教の場合は事情が違う。なぜ我々はイエスの言うことに従わなければならないのか、という根拠がはっきりしていないのである。イエスが預言者だから、彼の言うことに權威があるのだろうか。それとも、イエスが神だから、彼に従わなければならないのか。キリスト教徒がイエスの言葉を尊重すべき根拠が、そもそも判然としていない。そして、もしもイエスが神だとすれば、そのことどんな意味があるのか、ということに関しても議論が紛糾している。また、イエス自身は自分が神であるとは一言も言っていない。それなのに、イエスが神であると断定すべき根拠がどこにあるのだろうか。はっきり言って、キリスト教には疑問しかない。何を信じればよいのか、全く明らかになっていない。

それはなぜかと言えば、イエスの言葉が不十分だったからである。イエス自身が、自分の考えを十分に示すことができず、様々な疑問を残したまま死んでしまったからである。もちろん、たとえ彼が長生きしたとしても、彼の教えが完全なものになったとは思えない。そもそも、キリスト教という宗教は不完全なものだったのである。だから、何が異端か正統かということも、明確にすることができない。

仏教の場合、仏陀はほとんどあらゆる疑問に答えを出しているのに、疑問の余地がない。もしも、仏の教えに関して疑問を持つものがあるならば、それは彼自身の勉強が足りないせいだ、と言っているのである。

聖書は短いので、誰でも読み通すことができるし、そらんじることもししくはないだろう。しかし、仏の言葉を全て学び尽くすということとは、並大抵のことではない。もちろんそれは、文章量が多いというだけのことでない。仏の教えは、機に応じ、人に応じて説かれるので、その所説は変幻極まりない。その本質を把握するということが非

常に難しいのである。

また、仏陀はことあるごとに口げんかを戒めている。何が本当の仏教であり、何が偽りの仏教であるか、などといった議論にうつつを抜かすこと自体が仏の教えに反している。目に見える宗派の対立は、仏の道の広大さに比べれば無に等しい。そういった自覚を持つ者こそが、よい仏教徒であろう。

3

近頃は、仏教を研究する者の間で、大乘経典は仏説ではない、という説が唱えられている。これについて考えてみたい。

仏典には大きく分けて二種類のものがある。一つは北伝のもので、チベットやネパール、中央アジアを経由して、中国や日本へと伝えられた。いわゆる大乘経典である。もう一つは南伝のもので、南インドからスリランカ、ビルマ、タイへと伝えられた。これは阿含経典、あるいは小乗経典と呼ばれている。大乘経典は仏説ではない、という立場をとる者は、大体、小乗経典が仏陀の真説であると考えているようである。では、彼らの論拠を調べてみよう。

一つ目の論点は、小乗経典の記述と大乘経典の記述は、その様式があまりにも異なるので、同一の作者によるものとは考えられない、ということである。二つ目は、小乗経典の成立年代は大乘経典よりも古いので、小乗経典の方がより仏説に近いと考えられる、ということである。

二つ目の論点から見てゆこう。まず指摘できるのは、成立年代が古いからといって、それが釈迦の真説であるという保証にはならない、ということである。文献学的な研究によれば、大乘経典はだいたい紀元後に成立したものである。一方で小乗経典の中には、紀元前まで年

代を遡れるものも少なくない。ゆえに、小乗経典の方が、釈迦の説法をより原型に近い形で残している可能性が高い、ということは言える。しかし、それ以上のことは言えない。紀元前に書かれたものだから百パーセント仏の言葉に違いない、ということが許されるのであれば、紀元前に著された書物は全て仏説だということになるだろう。

また、小乗経典はパーリ語で書かれている。しかし、仏陀がパーリ語を使っていたという保証はない。おそらくは別の言葉を使っていただろう。であれば、パーリ語の経典を作ったのは、仏陀以外の人間であることになる。どうしてそれが、仏陀の言葉をそのまま記したものだと言えるのか。

また、小乗経典であっても、その成立は仏陀の在世までは遡れない。ということは、口伝で伝えられた仏陀の言葉を、何世紀か後に、仏陀以外の人間が、それをパーリ語に訳してから、文章の形に残したものだということになる。それが本当に仏説そのものだとと言えるのか。

次に、小乗経典と大乘経典の記述様式の違い、という一つ目の論点を検討しよう。これらの経典群の表現技法が異なることから、それを記述したのがそれぞれ別の人間である、という推論をすることは許される。しかしそのことは、それが同一人物の言行を記録したものである、という推論を妨げるものではない。一人の人物の言行を、二人以上の異なる人物が記録したならば、その記録者によって、記述の方法や内容が異なるのは当然である。特に、何世紀も前の人物の言葉を、別々の地域や年代に生きた記録者が書き留めたのであれば、その表現が互いにかき離れたものになるのは自然であろう。ゆえに、その表現が異なるから、両者が同一人物の言行を記録したものはありえない、ということにはならない。

もちろん、ここまでの議論は、大乘経典が仏説であることを証明す

るものではない。しかし、ここで述べたような証拠をいくら積み重ねても、大乘経典が仏説でないことを証明することもできないだろう。対論者が大乘経典を批判するために用いる論拠は、すべてそのまま、対論者が依拠する経典を批判するために用いることができるのである。したがって、大乘経典は仏説ではない、という批判は有効性を持たない。

また、大乘経典も小乗経典もどちらも仏説ではない、という立場もありうるだろう。そういう人には勝手に言わせておけばよい。

たとえば、仏陀の声を記録した磁気テープが残されていたとしよう。それを再生してみたところで、その内容は誰にも理解できないだろう。仏陀の使っていた言語が、現代の我々に理解できるはずもないからである。

つまり、仏陀の言葉がそのまま残されていたとしても、何の意味もない。どれほど価値のある言葉でも、それを理解することができなければ、意味はないのである。価値があるのは、仏陀が説いた教えの内容であって、言葉そのものではない。その内容さえ正しく伝えることができれば、表現の方法は問題にならない。ゆえに、どれが正しい仏説かという議論は時間の無駄であろう。

聖徳太子も白隠慧鶴も、法華経が仏説であることを疑っていなかった。我々にできるのは、彼らと同じように、それを信じることではなからうか。現代の学者の傲慢さを前にすれば、魔王波旬も顔を赤らめるだろう。

しかし、注意しなければならない。そもそも、このような学説を唱えたのは誰であったのか。この説を唱道し広めようとしたのは、果たして西洋人ではなかったか。彼らは、我々の仏法への信仰にひびを入れるために、努めてこの学説を流布させようとしたのではないか。こ

れは下衆の勘繰りかもしれない。しかし、用心するべきである。

民主主義と真理

ある人がどう思うかが、正しいものは正しいし、間違っているものは間違っている。国民全体がどう思うかが、正しいものは正しいし、間違いは間違っている。ある人がどう思うかが、また、国民全体がどう思うかが、それとは全く無関係に、何が正しく、何が間違っているか、ということとはあらかじめ決まっている。

国民全体が一足す一は三だと思っても、実際には、一足す一は二である。複数の人間の思いなしが一致するということと、それが正しいかどうかということとは、全く別の問題である。

民主主義とキリスト教は不可分のものである。何が正しいかを客観的に決定することはできない、という前提から出発することで、多数者の合意を最善の解として採用する、という民主主義的な考えが導かれる。

しかしそもそも、何が正しいかを客観的に決定することはできない、という前提には、何か根拠があるのだろうか。そして、その前提が否定された場合、民主主義には一体どんな正当性があると言えるのだろうか。もしも、その前提に何の根拠もないのだとすれば、民主主義に普遍性があるとは言えなくなるだろう。しかし、そこにはいかなる根拠も存在しないのである。

民主主義によって真理に到達することはできないし、まして、それが真理を保証することなどありえない。ゆえに、民主主義によって平和が達成されることもありえない。民主主義によって最善の選択がなされる、という考えは、何の根拠もない、ただの迷信である。

では、真理とは何か。真理とは諸行無常であり、諸法無我であり、涅槃寂静である。真理とは何であるか、ということは、仏陀によって余さず解き明かされている。真理に到達するための手段についても、同様に余さず解き明かされている。

自由

自由とは、束縛から解き放たれることである。束縛とは、無知であり、貪欲であり、怒りである。無知を滅ぼすことができれば、その人は自由になる。貪欲を滅ぼすことができれば、その人は自由になる。怒りを滅ぼすことができれば、その人は自由になる。

人は、生まれながらに鎖に繋がれている。そして、それを当然のこととして受け入れている人々がいる。人間には無知という性質がある。人間には貪欲という性質がある。人間には怒りという性質がある。これらのものから逃れることはできないのだ、と諦めている人々がいる。

しかし、彼らは間違っている。実際には、それらのものを克服する方法がある。無知を滅ぼす方法があり、貪欲を滅ぼす方法があり、怒りを滅ぼす方法がある。人間が、あらゆる束縛を滅ぼし、自由になることが可能であることを、仏陀は証明された。

仏を知るものは幸いである。仏を知るものは、知恵を手に入れる。仏を知るものは、幸福を手に入れる。仏を知るものは、自由を手に入れる。仏に幸あれ。

私は、私が今までに為したすべての努力を、あまねく衆生のさとりに振り向ける。どうか私の言葉が、聞く耳を持つ人々に届くように。

そして、それらの人々が仏の言葉を学ばれるように。私は願う。